教科書との対応

三省堂 中2『現代の国語2』p.140〜141「漢文の読み方・漢詩の形式」（漢詩の本文は p.136〜139）
光村図書 中2『国語2』p.164「律詩について」（漢詩の本文は p.158〜162）
東京書籍 中2『新しい国語2』p.146〜「漢詩」

漢詩のきまり　これだけはおさえる

一　**句の数**　漢詩の一行を「句」という。**四句＝絶句**、**八句＝律詩**。

二　**字の数**　一句が**五字＝五言**、**七字＝七言**。一と二を合わせて、**五言絶句・七言絶句・五言律詩・七言律詩**。数えるのは白文の漢字だけ（送り仮名・返り点は数えない）。

三　**押韻**　決まった句の終わりに、ひびきの似た字を置くこと。**五言は偶数句の終わり、七言は第一句と偶数句の終わり**が基本。句の最後の字を**音読み**して確かめる（五言でも第一句の終わりでふむ詩がある）。

四　**対句**　組み立てがそろい、意味が対応している二つの句。**律詩は第三・四句と第五・六句を対句にする決まり**。絶句には決まりはないが、対句を使う詩もある。同じ位置の字どうしを比べる。

五　**組み立て**　絶句は**起句（うたい起こす）・承句（受けつぐ）・転句（場面を変える）・結句（まとめる）**。前半が景色（情景）、後半が思い（心情）になることが多い。律詩は二句ずつのまとまりで読む。

六　**返り点**　**レ点**＝下の一字を先に読み、すぐ上の字にもどる。**一二点**＝二字以上はなれた字にもどる（一点まで読んだら二点へ）。レ点と一点が重なると、一点の字まで読んでからもどる。

七　**書き下し文**　送り仮名は**ひらがな**にする。日本語の助詞・助動詞にあたる字（不＝ず、也＝なり、之＝の など）も**ひらがな**。**置き字**（而・於・矣 など）は読まず、書き下し文に書かない。

例題　**次の漢文を、返り点にしたがって書き下し文に直しなさい。**

（1）欲窮千里目
（2）学而時習之

解き方　（1）「欲」「窮」をとばして「千」「里」「目」と読み、一点の「目」から二点の「窮」へ、さらにレ点で「欲」へもどる。読む順は「千→里→目→窮→欲」。（2）「学」を読み、置き字の「而」は読まない。「時」、レ点で「之」→「習」。「之」は代名詞「これ」なので漢字のまま。

答え　（1）千里の目を窮めんと欲して　（2）学びて時に之を習ふ

【A】次の漢詩（李白「静夜思」の白文と書き下し文）を読んで、あとの問いに答えなさい。

（白文）床前看月光　疑是地上霜
　　挙頭望山月　低頭思故郷
（書き下し文）
床前月光を看る
疑ふらくは是れ地上の霜かと
頭を挙げて山月を望み
頭を低れて故郷を思ふ
（注）床前＝寝台の前。
疑ふらくは是れ……かと＝……ではないかと思う。

問一 【A】の詩の形式を、漢字四字で答えなさい。

問二 【A】の詩で押韻している字を、白文から三つ抜き出し、句の順に書きなさい。

問三 【A】の第三句と第四句は対句である。第三句の「挙」「山月」に対応する語を、第四句の白文から抜き出しなさい。

挙

山月

問四 【A】の第三句「挙頭望山月」を「頭を挙げて山月を望み」と読むための返り点として正しいものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 挙頭望山月
イ 挙頭望山月
ウ 挙頭望山月
エ 挙頭望山月

問五 【A】の結句（第四句）で、作者の思いが向けられているものを、白文から二字で抜き出しなさい。

問六 【A】の第一句・第二句で、作者が「地上の霜」ではないかと思ったものは何か。白文から二字で抜き出しなさい。

問七 一句が七字で、八句から成る漢詩の形式を、漢字四字で答えなさい。

【B】次の漢詩（王之渙「鸛鵲楼に登る」）の白文と書き下し文）を読んで、あとの問いに答えなさい。

（白文）白日依山尽　黄河入海流　欲窮千里目　更上一層楼
（書き下し文）白日山に依りて尽き　黄河海に入りて流る　千里の目を窮めんと欲して　更に上る一層の楼
（注）白日＝かがやく太陽。　依りて＝沿って。　千里の目を窮めん＝はるか遠くまで見わたそう。　一層＝もう一階。

問八 【B】の詩で、対句になっている句の組み合わせとして最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 第一・二句だけ
イ 第三・四句だけ
ウ 第一・二句と第三・四句
エ 対句はない

問九 【B】の四つの句のうち、書き下し文に直すときに、返り点が一つもいらない句は第何句か。漢数字一字で答えなさい。

問十 次の（1）・（2）に答えなさい。
（1）「春眠不覚暁」を「春眠暁を覚えず」と書き下すとき、ひらがなで書く字を一字抜き出しなさい。
（2）「青取之於藍」（青は之を藍より取る）で、読まない字（置き字）を一字抜き出しなさい。

（1）
（2）

解答と解説

漢詩 基礎① 漢詩のきまり（絶句・律詩・押韻・対句・返り点）

練習

問一 五言絶句

【根拠】四句で、どの句も「床前看月光」のように五字。

【読み方の型】句の数（四句＝絶句・八句＝律詩）と一句の字の数（五字＝五言・七字＝七言）を、白文の漢字で数える。

【よくある間違い】「五言律詩」……律詩は八句。この詩は四句。／「七言絶句」……書き下し文「疑ふらくは是れ地上の霜かと」の字数で数えている。

問二 光・霜・郷

【根拠】第一句の終わり「光（コウ）」・第二句「霜（ソウ）」・第四句「郷（キョウ）」。

【読み方の型】偶数句の終わりを音読みし、第一句の終わりも確かめる。「光（コウ）・霜（ソウ）・郷（キョウ）」は、どれも「〜ウ」のひびきでそろっている。

【よくある間違い】「霜・郷」だけ……五言でも、この詩は第一句の終わりでも韻をふむ。／第三句の「月（ゲツ）」……転句の終わりはふまない。

問三 挙＝低　山月＝故郷

【根拠】第三句「挙頭望山月」と第四句「低頭思故郷」。

【読み方の型】同じ位置の字を比べる。「挙（あげる）／低（たれる）」は反対の意味、「頭／頭」は同じ字、「望（ながめる）／思（思う）」は動作、「山月／故郷」は動作の相手。見上げる（目の前の月）と、うつむく（遠い故郷を思う）の対比になっている。

【よくある間違い】「挙」に「頭」……「頭」は二字目で、第三句の「頭」と同じ字。一字目どうしを比べる。

問四 イ

【根拠】書き下し文「頭を挙げて山月を望み」の読む順は「頭↓挙↓山↓月↓望」。

【読み方の型】書き下し文から読む順を出し、一字もどる所はレ点、二字以上もどる所は一二点。「挙」は一字下の「頭」から返るのでレ点。「望」は二字はなれた「月」から返るので一二点（「望」に二点、「山月」の「月」に一点）。

【よくある間違い】ア……「望」にレ点だと「山↓望↓月」の順になる。／ウ……「挙」に返り点がないと「挙↓頭」の順になり、「頭を挙げて」と読めない。／エ……「挙」に二点、「山」に一点だと「頭↓望↓山↓挙↓月」の順になり、書き下し文と合わない。

問五 故郷

【根拠】第四句「頭を低れて故郷を思ふ」。床の前の月光を霜かと思い（起・承）、顔を上げて山の月をながめ（転）、うつむいて故郷を思う（結）という流れ。

【読み方の型】絶句は、前半が景色、後半（とくに結句）が作者の思い。結句の「思ふ」の目的語（〜を）をさがす。

【よくある間違い】「山月」……第三句で見上げた月。月をきっかけに、思いは故郷へ向かっている。

問六 月光

【根拠】第一句「床前月光を看る」と第二句「疑ふらくは是れ地上の霜かと」。

【読み方の型】「疑ふらくは是れ……かと」は「……ではないかと思う」（注）。何を見てそう思ったのかを、前の句（第一句の「看る」の目的語）から確かめる。寝台の前にさしこむ白い月の光が、霜のように見えたのである。

【よくある間違い】「山月」……第三句で見上げた月そのもの。霜とまちがえたのは、床にさしこんだ月の光。

問七 七言律詩

【根拠】きまりの一・二。一句七字＝七言、八句＝律詩。

【読み方の型】形式の名は「字の数（五言・七言）」＋「句の数（絶句・律詩）」の順で言う。四つの形式（五言絶句・七言絶句・五言律詩・七言律詩）を表にして覚えるとまちがえない。

【よくある間違い】「律詩七言」……順番が逆。／「七言絶句」……絶句は四句。

問八 ウ

【根拠】第一・二句は「白日／黄河」（自然の大きなもの）「依山／入海」（どこへ）「尽／流」（どうなる）、第三・四句は「欲窮／更上」（したいこと・すること）「千里目／一層楼」（数をふくむ語）が対応する。

【読み方の型】絶句に対句の決まりはないが、使う詩はある。二句ずつ、同じ位置の語を比べて確かめる。この詩は、四句すべてが対句になっている。前半は大きな景色（太陽と大河）、後半は「もっと遠くを見たい」という思いと行動。

【よくある間違い】ア……第三・四句も「千里（数）／一層（数）」など組み立てがそろっている。

問九 四（第四句）

【根拠】第四句の書き下し文「更に上る一層の楼」は、白文「更上一層楼」と同じ順に読む。「更に」「上る」「一層の」「楼」と、上から一字（一語）ずつ読んで送り仮名をつけるだけでよい。

【読み方の型】書き下し文の漢字の順と白文の順を比べ、同じなら返り点はいらない。第一句「山に依りて」、第二句「海に入りて」、第三句「千里の目を窮めんと欲して」は、下の字を先に読む。

【よくある間違い】第二句……「黄河入海流」は「海に入りて」で「入」より「海」が先。レ点が要る。

問十 （1）不　（2）於

【根拠】（1）「不」は打ち消しの助動詞「ず」にあたるので、書き下し文ではひらがなで「ず」と書く。（2）「於」は置き字。書き下し文では「藍より」の「より」の働きをしているが、字そのものは読まない。

【読み方の型】書き下し文では、日本語の助詞・助動詞にあたる字（不・也・之〔の〕など）はひらがな、置き字（而・於・矣など）は書かない。

【よくある間違い】（2）「之」……ここの「之」は「これ」と読む代名詞なので、漢字のまま「之を」と書く。読まない字ではない。